

# 農都共生のススメ



林 美香子 (はやし みかこ)

エコライフジャーナリスト・  
慶應義塾大学大学院SDM研究科教授

札幌出身。北海道大学農学部卒業後、札幌テレビ放送アナウンサーを経て、独立。現在、AirG「ミカコマガジン」など担当中。「食育」「農業」「地域づくり」などのフォーラムに、パネラー・講師・コーディネーターとして参加。北海道大学より博士(工学) Ph.Dを取得。著書『農都共生のヒント』(寿郎社)など。

### 農村と都市の共生＝農都共生

庭先やベランダで気軽に家庭菜園を始めたり、農村でゆっくりと過ごす「グリーンツーリズム」を楽しむ都会の人たちがなんと増えていることだろう。そうした雑誌の特集記事やテレビ番組を見かける機会も、ずいぶん多くなった。

朝夕の通勤ラッシュ、過密な住宅事情、ギスギスした人間関係など、都会暮らしに疲れを感じている人たちにとって、農村地帯は「懐かしさ」と「憧れ」を感じる場所である。農村地帯には、生産をする現場としての機能だけでなく、癒しや教育力など「多面的機能」と呼ばれる多くの可能性がある。

だが、その農村地帯では、人口減、少子高齢化、離農、後継者不足、耕作放棄地の増大など、厳しい現実が横たわっている。

私はもともと農業・農村に関心があり、北海道大学農学部で学んだ後、札幌テレビ放送にアナウンサーとして入社。退社後は、放送の仕事と同時に、「食と農」「地域づくり」「環境」などをテーマに取材・執筆・講演活動が続けてきた。

さらに、じっくりと研究したいと考え、仕事の傍ら、2003年から北海道大学大学院工学研究科社会人博士課程に入学。3年間の研究成果を「農村と都市の共生による地域再生の基盤条件の研究」という論文にまとめ、博士号を取得した。この論文を中心に『農都共生のヒント』(寿郎社刊)として出版したので、興味のある方はご一読いただきたい。「農都共生」は、「農村と都市の共生」を短縮した言葉で、最近、地域づくりの分野で使われることが多くなっている。

2008年4月に新設された慶應義塾大学大学院システムデザインマネジメント(SDM)研究科の特別研究教授となり、札幌在住のまま、環境や農業をテーマとするプロジェクトに参加し、北海道内の農家の協力を得て、農村が都市と共生しながら持続的に食料生産を続ける仕組みづくりの研究を進めている。東京の学生たちが北海道の農業現場を訪れ、農業者と語り、研

究することも、農都共生の第一歩だと考えている。

教授に就任したのをきっかけに、「農都共生」をより推進したいと考え、関心のある人たちに呼びかけ、「農都共生研究会」を設立し、フォーラムの開催、農園ツアーなどの活動を継続している。(詳しくは、「農都共生研究会」のホームページをご参照いただきたい。

<http://www.noutokyousei.jp/>)

都会の人が農村地帯を訪れ、農産直売所で買い物をしたり、休暇を過ごすなどの農都共生の推進は、地域再生を実現するひとつの方法だと確信している。本来、農村と都市は敵対する存在ではなく、互いに必要とされるもの。農村と都市が近づき、共生すれば、それぞれがもっと豊かになれるはずだ。

### さあ、農村地帯に出かけよう

農家民宿(ファームイン)・農家レストラン・農業体験・農産直売所などに出かけ、都市住民と農家が互いに交流、連携していくことが、農都共生へとつながっていく。都市生活者のライフスタイルが変化し、「物質的豊かさ」より「心の豊かさ」を重視する人や、レジャー・余暇に生活の力点を置く人が増え、「都市住民の農業・農村への関心」が高まっている今こそ、農都共生のチャンスだとも思っている。

私自身が、農都共生を意識するようになったのは、15年前に旅した英国・湖水地方の農村風景だ。「ピーターラビット」の作者ビアトリクス・ポターが多額の印税を投じて購入したこの地には、今ものどかな牧草地帯が広がり、多くの人々が訪れる。心安らぐ農村地帯で過ごすグリーンツーリズムの原点に心を打たれた。

農業・農村の持つ多面的機能を活かすために、農都共生はもっと活発になっていくべきだと考えている。都会の人に、癒しや楽しみを提供してくれる農村。その代価として、都会の人たちが農村でお金を使うことは、農村地帯にとって大きな経済効果がある。全国各地で消費に使われる金額の8割は、全国チェーンの流

通業などを介して、東京に還流しているといわれる日本の経済システム。疲弊する地方にお金が循環する仕組みとしても、農都共生に注目したい。

そして、都会のみなさんに「農都共生のススメ」を呼びかけたい。「さあ、農村地帯に出かけよう」。

### 慶應学生の農業研修

年金・医療などさまざまな分野で、ほころびが見え始めた日本の社会。次の時代に対応する新たな社会・技術システムが望まれている。そうした問題意識から、新設されたのが慶應義塾大学大学院SDM研究科。新たな社会・技術システムの構築を目指すと同時に、そのデザインとマネジメントができる人材を育成しようという日本初の大学院である。

私が担当中のアグリゼミ(農業を多角的に考え、研究するゼミ)に参加している学生たちは、農業とエネルギー、農業法人のビジネスモデルなど、それぞれのテーマを設定し、研究をしている。

文献による調査だけではなく、現場に入り、問題点を肌で感じるのがなにより大切という研究方針の下、アグリゼミの修士一年の男子学生4人と共に、昨年9月上旬、北海道で、2泊3日の農業研修を行った。以前から、取材などを通して交流のある北海道内の米作農家・酪農家・農家レストランなどに学生たちを引率し、農業体験や聞き取り調査を実施した。

4人の学生のうち3人は30~40歳代の社会人学生。一人は団体職員をしながら、一人は会社の国内留学制度を利用して学業に専念、一人は会社を退職後学んでいる。そしてもう一人は、大学卒業後すぐに大学院に進学した学生。農業体験は初めてという学生ばかりだったが、北海道ならではのゆったりと広がる農村風景の美しさに感激の面持ちだった。

千歳空港から車で1時間ほどの由仁町の「ふれあい体験農園みたむら」では、実際に畑を耕し、ビニールハウス内でほうれん草の種まきを体験した。このほうれん草は、その後、園主の三田村雅人さんが栽培管理

をしてくれ、見事に成長。去年11月に日吉キャンパス（横浜市）で開催された研究発表ポスター展では、学生たちの発案により、「アグリゼミ・ほうれん草試食会」を実施。来場者の関心を集め、「甘くておいしい」などと好評を得た。

滝川市の「中野ファーム」では、中野義治さんの指導を受け、小麦まきのための肥料運びなどの農作業体験をしたり、トラクターに同乗させてもらったり、農家での宿泊も体験。農業がいかにか手間がかかり、自然相手の仕事であるかを実感したようだった。また、農業機械の操作や農作業の手際の良さ、さらに大工仕事、まき割り、ソバ打ちなど、なんでも自分でこなす農業者の技にも感心しきりだった。とれたてのトマトやトウモロコシのおいしさにも、感激していた。

学生たちは、「農作業を体験して、大地の恵みや水、太陽の存在の強さを感じた。消費する立場のみだと視野が狭くなり、農家の苦労やありがたさを忘れがち。農作物に思いを込めて作る生産者の心や、農家のやる気に触れることができ、本当に良かった」と、感想を語っていた。

長沼町の広々とした田園風景に立つ「レストラン・クレス」は、北海道の大手流通業の副社長だった干場一正さんが定年退職後、新規就農して始めた農家レストラン。自家栽培した野菜をふんだんに使ったバイキングメニューの味の良さが評判で、人気を集めている。レストランの裏には広い農園や花畑が続き、客たちが散策を楽しんでいる。また駐車場の脇には、近くの農家の人たちが出店する直売所があり、食事の前後で買い物をする客も多い。

「東京にはありえない空間だ」と、店の窓からの田園風景を楽しみながら、野菜のおいしさを堪能する学生たち。休日には、客が5回転するほど繁盛し、地元

の雇用創出にも大きく貢献している経営に、農業ビジネスの新たな可能性を見出していた。

また、4人とも、景観の美しさ、癒しの効果、子供への教育力、生涯学習の場としての力など、農業・農村の持つ多面的機能の素晴らしさを感じたという。そして口々に、「家族や友人たちとまた来たい」とも語っていた。普通の観光地では味わえない新鮮な経験となったようだ。

都会の学生が農村地帯に出かけ、畑を耕すなどの体験をし、農業や食について考えること自体、大きな意味があると信じている。

国民全員が農業を体験すべきと考える「国民皆農」という言葉があるが、都会の若い世代にこそ、農業体験や農村ボランティアが必要なのではないだろうか。東京など大都会の暮らしでは味わえない、農業・農村の多面的機能が作り出す魅力がたくさんあるのだから。

## おわりに

今後は、農都共生の素晴らしさをより多くの都市生活者に伝え、体験してもらえるような大がかりな仕掛けや、ITを駆使した情報発信も必要なのではないかと思う。フランス・イギリスなどのツーリズム先進国に比べると、まだ緒に就いたばかりの日本。北海道には大きなチャンスがあるとも言える。

また、多くの国民がゆったりと長期休暇をとり、グリーンツーリズムを楽しみ、農都共生を推進できるような社会にするためには、バカンス法の制定も望まれる。

最後にもう一度、都会のみなさんに「農都共生のススメ」を呼びかけたい。

「さあ、農村地帯に出かけよう。」

